

言い知れない感情の中、わたしたちはお互いを抱きしめあったまま動かなかった。

ああ、そうだったんだあ、と、思う。そりゃあ、それだけわたしを想ってたんなら、そのわたしの口からあんなこと聞かせられたらショックだよなあ。まして山形とかなさすぎだし。そう思うとまた余計に、わたしの腕の中で体を震わせているまりあが、なんだか、切なく、愛おしく感じられてきて……。

「いゆいゆ……わたしたち……ずっとずっと一緒……だよわ……」

「うん……？　そっだね……永遠に、かな……」

こんな予想外の事態のはずなのに。不思議と、そんな言葉が全くの無意識のうちに口をいついて出た。まるで定められた台本の台詞のように、予定調和のように……そしてその一言、その一節はわたしたちの心を甘美に満たしていった。

二人抱き合ったまま見上げた星空は、イルミネーションのようにきらきらと明滅を繰り返していた。そんな星たちの光に照らされながら、わたしはなんとなく考えた。

わたしは、きつと、まりあのことが好きなんだ。まりあがわたしのとき、こんなにも好きなのと同じように。

「……愛……」

耳元でささやくまりあのおもむきの声。

愛………？　これが、愛………？　これが、愛………？

そんなこと、女の子同士だったし、突然だったし、考えたことも無かったし、はっきりとさっさととは言えなかったけど。でも、まりあがささやく言われると心地よかったから。気持ちよかったから。心が温かくなってきたから。